

1875 日本政府が軍艦・雲揚号を、測量の名目で、首都に近い江華島に派遣した。水の補給のためと称したボートが砲撃を受けると、雲揚号からは艦砲射撃が行なわれ、上陸した日本兵は村を焼き払った。

1876 日本はさらに7隻の艦隊を送り込んで脅しをかけながら、日朝修好条規を締結させた。関税自主権どころか関税そのものを認めないという不平等条約だった。

1894 朝鮮半島南西部・全羅道で為政者の悪政に抗議する農民反乱が起こった。農民軍は「人を殺さず、物をとらない」「世を救い、民を安らかにする」「日本と外国勢力を駆逐し、道理をはっきりさせる」「ソウルに攻め込み、権力者を打ち倒して政治をあらためる」という誓いを立てていた。甲午農民戦争と呼ばれるこの戦争で、農民軍はいったん勝利した。それに不安を覚えた日本は朝鮮に出兵し、宮廷を襲って、日本にとって好都合な人物を首相に据えた。日本と清国との間に、朝鮮を戦場とする戦争が始まった。朝鮮の農民軍は「反侵略」を掲げて再び蜂起した。日本軍は圧倒的な軍事力でこれを鎮圧した。

1895/10 日清戦争に勝利した日本が朝鮮経済の中に占める支配力は圧倒的なものとなった。当時、政治の実権を握っていた閔妃一族は、民衆の間に根強い反日感情を背景に、ロシアやアメリカの支持を取りつけようとしていた。これを知った日本側は、日清の講和が成った1895年の10月、新任公使・三浦梧楼の計画の下で、日本軍に警護された「壮士」たちが王宮に侵入し、閔妃ら3人の女性を殺し、死体を焼き捨てるなどの暴虐すら行なった。

1904 20世紀に入ってから、日本軍の仁川上陸をきっかけに始まる日露戦争（1904年）、日露間での中立を望む韓国政府に対して、日本が自陣営に引き入れるための「日韓議定書」の押し付け（1904年）が続いた。日本がロシアに勝利して結ばれたポーツマス条約（1905年8月）は、「ロシアは韓国における日本の政治上・軍事上および経済上の利益を認め、日本の韓国に対する指導、保護および監督に対し、干渉しないこと」を定めた。もちろん、当事国の韓国の頭越しの協定である。

1905年10月 乙巳保護条約（第二次日韓協約）— 「日本は、韓国の外交関係及び事務を監理指揮する」「日本国政府は、韓国と他国との間に現存する条約の実行を全うする任務に当たり、韓国政府は今後日本国政府の仲介によらずして国際的性質を有する何らの条約もしくは約束をしないことを約する」「日本は、韓国皇帝陛下の下に、代表者として統監をおく。統監は、外交に関する事項を管理するため京城に駐在し親しく韓国皇帝陛下に内謁する権利を有する」。

1906年2月 乙巳条約締結後、韓国では決起を訴えて自殺する者、閣議の席にいた者を「乙巳五賊」と呼んで告発する者絶えぬなか、ソウルに創設された統監府に初代統監・伊藤博文着任。在韓国日本陸軍元帥も兼任。在韓日本軍増強、鉄道・通信の整備・小学校への日本人教員の配置、警察も日本の管理下に。

1907年 韓国皇帝・高宗、ハーグでの万国平和会議に密使を送り、保護条約の不当性を訴えようとするも、米英ら植民地主義大国が反対し出席できず。高宗は退位させられ、日本の言いなりの人物が李朝最後の皇帝として即位。韓国軍解散、統監府は韓国内政をも完全に掌握。日本の第一銀行が発行する銀行券が通用。大阪で作られた新貨幣が流通するようになり、韓国人が持っていた貨幣と不当な比率で交換。

1908年 「東洋拓殖会社」設立。以後、韓国人の土地を根こそぎ奪うことになる。日本人高利貸しは無制限の土地所有権を得る。この間、なし崩し的に進められる植民地化に抵抗する「抗日義兵闘争」が農村部各地で、また都市部では「愛国文化啓蒙運動」が広がるが、日本はこれを徹底的に弾圧。

1909年9月2日 義兵闘争にも愛国文化啓蒙運動にも参加した安重根、ハルビン駅頭で統監・伊藤博文を射殺。

1910年8月29日 韓国併合条約公布。